

おど キツネ踊り

— ひめしまの子どもたちがキツネになる日 —



朗読音声のダウンロード
Audio download

★読む前に Before you read

《多読の読み方》

多読とは、とてもやさしい本から楽しくたくさん読んで日本語を身につけていく方法です。

次の4つのルールを守って楽しく読みましょう。

1. やさしいレベルから読む
2. 辞書を引かないで読む
3. わからないところは、とばして読む
4. 進まなくなったら、他の本を読む



《How to do Tadoku》

Tadoku recommends that everyone should start with very easy books and enjoy a lot of them following the 'Four Golden Rules' below.

1. Start from scratch.
2. Don't use a dictionary.
3. Skip over difficult words, phrases and passages.
4. When the going gets tough, quit the book and pick up another.



ひめしま おおいとけん きた ちい しま す
姫島は大分県の北にある小さい、きれいな島です。住んで

ひと にん
いる人は2000人ぐらいです。

(大分県)



ひめしま でんせつ はなし
姫島にはたくさん伝説や、ふしぎな話 があるそうです。

そして・・・、この島の子どもたちは毎年、夏にキツネ
になるんですよ。

こ
子どもがキツネになる・・・。どういうことでしょうね。



いちろう ひめしま く
一郎、姫島に来る

あお うみ うえ ひめしま い すす
青い海の上を姫島へ行くフェリーが進んでいます。フェリ
ーのデッキに一人の男の子がいます。



はなし いちろう しょうがっこういちねんせい おとこ こ なつ
この話は、「一郎」という小学校1年生の男の子の夏の
物語です。

おとこ こ なまえ いちろう しょうがっこう ねんせい なつやす
その男の子の名前は一郎。小学校1年生です。夏休みにお
とう かあ どうきょう ひめしま
父さんとお母さんといっしょに、東京から姫島にいるおば
あちゃんに会いに来ました。一郎は姫島に行くのは初めてな
ので、とても楽しみにしています。

フェリーが姫島に着くと、おばあちゃんが待っていました。

「あつ、おばあちゃんだ！」

「一郎ちゃん、よく来たね。」



おばあちゃんは、うれしそうに笑っています。一郎は優しいおばあちゃんが好きです。一郎はおばあちゃんと一緒に歩きました。

その時、道のむこうの公園から、笛と太鼓の音が聞こえてきました。元気な子どもたちの声もします。

コラサッ、コラサッ！ソライタ、ソライタ、ヨイヨイ・・・

「おばあちゃん、みんな、何をしているの？」

「ああ、あれはキツネ踊りの練習だよ。もうすぐお盆だからね。」

「キツネ踊り？お盆？」

「やあ、なつかしいな！おれも子どもの時、踊ったなあ。」
お父さんが言いました。

「え？お父さんも？」

「うん。お父さんは子どものとき、毎年、お盆にキツネになったんだよ。」

お父さんは、笑って、言いました。

「お盆」と「盆踊り」

その夜、おばあちゃんは一郎に「お盆」と「キツネ踊り」について教えてくれました。

「日本の8月13～16日は『お盆』という期間で、家族が集まって先祖を迎えるんだよ。」

「ふーん。」

「そしてね、お盆にはいろいろな所で『夏祭り』があるんだよ。そこで『盆踊り』という先祖を迎える踊りを踊るの。」

「姫島にも盆踊りがあるの？」

一郎が聞きました。

「もちろん、たくさんあるよ。その中の1つに『キツネ踊り』という有名な盆踊りがあるんだよ。」

「キツネ踊り？」

「このキツネ踊りは姫島の子どもしか踊れないんだよ。小学校1年生から中学校1年生までの男の子だけがキツネになって踊るの。顔を白くして、赤いひげを描いて、白いシ

ャツを着るの。そして、白いズボンをはいて、白くて大きいしっぽをつけるんだよ。」

「どうしてキツネなの？」

「そうだねえ。はっきりしたことはわからないんだけど、キツネの体に神様が入って、米や魚がたくさん取れるようにしてくれると聞いたことがあるねえ。昔からキツネはいろいろなものに変えることができる不思議な動物だと言われているからね。さあ、もう、おやすみ。」

その夜、一郎はキツネと遊んでいる夢を見ました。

いちろう
一郎、「キツネ踊り」を踊ることが決まる

いちろう ぼん おど おど
「一郎、お盆にキツネ踊りを踊ってみないか。」

つぎ ひ あさ はん た どう い
次の日、みんなで朝ご飯を食べているとき、お父さんが言いました。

「え？でも、僕、踊ったことがないよ。それに、姫島の子
もじゃないし……。キツネ踊りは姫島の子どものしか踊れな
いんでしょう？」

れんしゅう
「練習すればいい。それに、おばあちゃんが姫島に住んで
いるから、大丈夫なんだよ。」

「ふーん……。」

いちろう よろこ おも
「一郎ちゃん、やってみたら？おじいちゃんも喜ぶと思う
よ。」

い いちろう きょねん し
おばあちゃんが言いました。一郎のおじいちゃんは去年死
んでしまいました。一郎はおじいちゃんが大好きだったので、
おじいちゃんがよろこ ぶ き ころ うご
喜ぶと聞いて、心が動きました。

「……僕、やってみる。」

「そうか！じゃあ、今日から練習だ。友達もできるぞ。」

とう いちろう たの
お父さんはとてもうれしそうです。一郎はちょっと楽しい
気持ちになりました。

いちろう あ 一郎、リンと会う

その日の夕方、お父さんは一郎をきのうの公園へ連れて行
きました。そこには一郎より年上の男の子たちが10人ぐら
いいました。そして先生といっしょにキツネ踊りの練習を
していました。

先生は優しく教えてくれましたが、一郎は、なかなか上手
に踊れません。40分ぐらい練習すると、一郎はとても疲れ
てしまいました。それで、アイスクリームをもらって、石の
上に座ってお兄さんたちの練習を見ることにしました。み
んな、毎年踊っているのです。とても上手です。左手に棒を
持って、跳びはねるように踊っています。



じょうず
「上手だなー。」

いちろう ちい こえ い
一郎は小さい声で言いました。

「うん。じょうず
上手だね」

うし こえ いちろう うし み
後ろで声がしたので、一郎はびっくりして、後ろを見ました。

すると、そこには小さなかわいい男の子が立っていました。

「きみ、だれ？」

ぼく にい おど へ た
「僕、リン。お兄ちゃん、踊り、下手だね。」

はじ あ じぶん ちい こ おど
初めて会った、自分より小さい子に、踊りが下手だと言われ

て、いちろう きぶん わる
一郎はちょっと気分が悪くなりました



でも、その男の子の踊りを見て、びっくりしました。手や足の動きも、跳びはねるのも、とても元気で上手だったからです。



「すごい！上手だね！キツネみたいだ。」

すると、男の子はちょっとびっくりした顔をしましたが、うれしそうに笑いました。

「教えてあげるよ。明日のお昼、ここに来て。」

男の子はそう言うと、走って帰っていきました。

次の日、リンと一郎は公園で練習しました。リンはあまり自分のことを言わないし、他の子どもたちとは話しません。でも、一郎はそんなことは全然気になりません。リンと踊っていると、一郎はすごく楽しくなるのです。二人は友達になりました。そして、お盆には一緒にキツネ踊りを踊ろうと約束しました。

いちろう
一郎とリン、キツネになる

いちろう ひめしま き しゅうかん す きょう がつ にち
一郎が姫島に来て2週間が過ぎました。今日は8月16日で、
いよいよキツネおど ひ よる じ はじ こ
どもたちの用意は昼から始まります。顔を白くして、赤いひ
げを描いてもらって、みんな次々に子ギツネに変わっていき
ます。



いちろう こ
一郎もリンもかわいい子ギツネになりました。



キツネ踊り^{おど}

キツネ踊りの日は、島の外から 2000人以上^{おど ひ しま そと にん い じょう ひと き}の人が来ます。

いつもは静かな姫島も、この日はとても賑やかになります。^{しず ひめしま ひ にぎ}



たくさんの人を見て、一郎は踊りを間違がえたらどうしよ^{ひと み いちろう おど まち}

うと心配になりました。リンも一郎と同じ気持ちのようです。^{しんぱい いちろう おな き も}

リンと一郎は強く手をつなぎました。さあ、いよいよキツネ^{いちろう つよ て}

踊りの始まりです。まず、お兄さんギツネたちが踊ります。^{おど はじ にい おど}

ちょうちんをつけた日傘を持って軽々と踊るのを見て、見^{ひ がさ も かるがる おど み み}

来た人たちは大喜びです。^{き ひと おおよろこ}



つぎ いちろう ちい さいご さい
次に一郎たち、小さいキツネ、そして最後は1歳ぐらいの

あか つづ
赤ちゃんギツネが続きます。



いちろう いっしょうけんめい おど たの
一郎は一生懸命に踊りました。リンもとても楽しそうに

おど
踊っています。お父さんもお母さんもおばあちゃんもうれし

わら
そうに笑っています。

コラサッ、コラサッ！ソライタ、ソライタ、ヨイヨイ・・・

コラサッ、コラサッ！ソライタ、ソライタ、ヨイヨイ・・・

よる ひめしま うみ たいこ ふえ ね こ
その夜、姫島の海には太鼓と笛の音、そして子どもたちの

こえ き
声がずっと聞こえていました。



さよなら、リン

あした いちろう とうきよう かえ ひ
明日は一郎が東京に帰る日です。でも一郎はなかなか眠
れません。

(リン、どうしちゃったんだろう・・・。)

キツネおどりの日、お祭りが終わって帰ろうとしたとき、
リンはとてもさびしそうな顔をしていました。でも、一郎は
とても疲れていたので、

「また明日、公園で会おうね。」

い かえ
と言って帰ってしまったのです。そして次の日、一郎は公園
に行ってみましたがリンは来ませんでした。次の日も、その
つぎ ひ
次の日も、リンは来ませんでした。いろいろな人に聞いても、
みんなリンという子どもは知らないと言います。

(もう会えないのかな。)

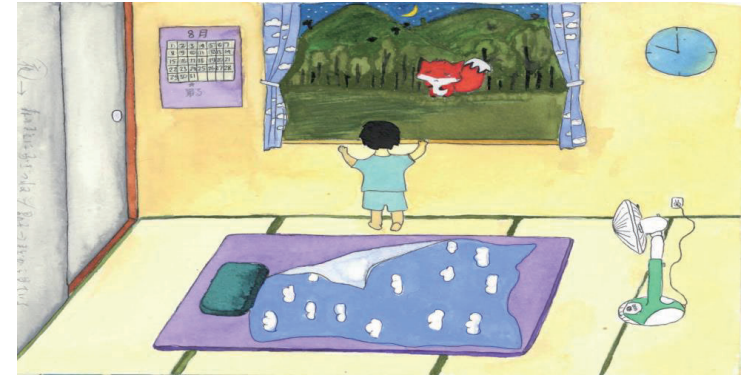
いちろう かな き も まど そと み
一郎は悲しい気持ちで窓の外を見ました。

すると・・・、くら なか なに うご
暗い中で何かが動きました。

「・・・キツネ？」

よくみると、もり き した ちい すわ
森の木の下に小さなキツネが座っています。

そして、いちろう み
一郎をじっと見ているのです。



その子ギツネは立ち上がると、ピョンピョン跳びはねて、
もう一回、一郎を見ました。そして、森の中に消えていきま
した。そのとき、いちろう
一郎はハッとしました。おばあちゃんが教え
てくれたキツネの話をおもいだしたのです。

(おばあちゃんはキツネはいろいろなものにか
できるって言ってた。あの子ギツネは、きっと・・・。)

そして、いちろう き
一郎は、消えていった子ギツネに向かって小さい声
で言いました。

「さよなら、リン。またね。」

著者：佐々木 美江（大分発わくわく読みものをつくる会 会員）

協力： NPO多言語多読（<https://tadoku.org>）

写真提供：姫島村役場

（公社）ツーリズムおおいた

イラスト：Pham Hai Anh（立命館アジア太平洋大学 留学生）

参考資料：

- ・姫島村史編纂委員会編(1986)『姫島村史』姫島村史編纂委員会
- ・甲斐素純、渋谷忠章、段上達雄編著(2012)『大分県謎解き散歩』

新人物往来社

- ・今村治華(2003)『島を旅する』南方新社

取材協力：姫島村役場

この本の中のイラスト・写真の二次使用を禁じます。

